護送船団が往く

相沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
護送船団が往く

【Ｎコード】
Ｎ５０３９Ｚ

【作者名】
相沢

【あらすじ】
１９４５年２月下旬。日本海軍のとある護送船団が突然ハルケギニアへと転移する――――故郷が無くなってしまった艦隊将兵４７００名余りの運命や如何に。

序章（前書き）

不定期更新＆初心者文章ですので、それでもよろしい温かい心をお持ちの方はどうぞ。

文章力向上のため、アドバイス等ありましたら是非感想にお書き下されば幸いです。

２０１１年１２月２１日　船団内容を変更。

序章

――時は１９４５年、昭和２０年２月の下旬。場所は朝鮮半島北部にある湾港都市『羅津（ラジン）』より、１０浬（約１８．５ｋｍ）程南下した朝鮮半島沿岸、日本海上。

この海域に今、日本海軍の艦艇１４隻が艦隊を組み、白波を蹴立てて日本本土への航行の途上にあった。目的地は山口県徳山に存在する、『海軍徳山燃料廠』。

艦隊は中心に空母を置き、その周りを巡洋艦、水雷艇、海防艦が取り囲む対空・対潜用の輪形陣を取っており、艦隊速度１５ノット（約２８ｋｍ）を保ちながら静々と南下を続けている。

これだけを見れば数ヶ月前に行われたマリアナ沖、レイテ沖海戦で完全に失われてしまった連合艦隊機動部隊の見事な復活にも見えるだろう。

しかしそれは空母の後方に、６隻の輸送艦が２列縦隊で続いていなければの話であるが。

艦隊輪形陣のほぼ中央に位置する空母――雲龍型航空母艦２番艦『天城』に後続して進むのは、２隻の特設運送艦と４隻の大型給油艦（タンカー）だ。これら６隻には羅津港から積み込んだ燃料・弾薬・食糧・その他軍需物資が文字通り甲板に溢れる位満載されており、この６隻が艦隊の最重要護衛目標であり、更には艦隊が編成される事となっ

た“作戦”の要でもあった。

……その作戦自体は何の事は無い、ただの朝鮮半島及び満州に備蓄されていた石油を含む重要物資及び兵器弾薬の輸送作戦である。しかしこの当時の日本は既に、戦争序盤に獲得した南方資源地帯と本土との輸送路が米軍により封鎖されつつあり、輸送船やタンカーを無事に本土と南方を往復させる事は非常に困難となっていた。ここに至り海軍は、1月下旬に発令された本土決戦『決号作戦』の準備として出来る限りの資源を本土へと運び込もうと考え、今作戦の発動に到ったのである。

艦隊は戦前は民間船として使用されていた運送艦と水雷艇、海防艦各2隻を除き、全て昭和19年以降に就役した新型艦で占められている。特に巡洋艦以上の大型艦艇は燃料不足で録(ろく)に動けず、羅津での補給の意味も含めて護衛艦隊に編入されていた。空母『天城』に至っては、飛ばす飛行機も無い事からその広大な格納庫を改造され、12000トンという大型貨物船並の物資搭載量を持たされた特務運送艦として編入されてしまっている。

更に護衛として派遣された4隻の艦艇も、駆逐艦より小型の水雷艇と海防艦であり、これがこの部隊を艦隊では無く“護送船団”である事を如実に示していた。

何はともあれ、羅津港に於いてなけなしの燃料補給を受け大量の物資を積み込んだ艦隊は、久しぶりに腹を一杯に満たして航海を続けていた。南方輸送路が遮断されたとはいえ、日本海は依然として日本の勢力圏内にあり、敵潜水艦や航空機が存在する情報も無い。行きも敵影すら見なかった。このまま順調に航海が進めば全艦無事

に徳山へと辿り着けると、艦隊将兵の誰もがそう思っていた。しかし――――。

――――――――――――

「……霧が深くなって来ましたな」

羅津港を出て約３時間。港から５０浬（約９３ｋｍ）程南の海上にて、旗艦を務める重巡洋艦『伊吹』の艦長である森下信夫大佐が呟いた。

「うーむ……この時期、この海域では海霧は起こらん筈なんだがなぁ」

それに応えるは、艦長の後ろに立つ男性。のんびりとしながらも５０代半ばという年齢を感じさせ無い、威風堂々した風格をその身から漂わせる彼の名は、木村昌福（きむらまさとみ）という。

この艦隊を預かる司令官である彼は、自分のトレードマークであるどでかいカイゼル髭を弄りながら窓の外を睨んだ。

この１時間、急に艦隊を包み始めた海霧はいよいよ濃くなり、既に『伊吹』の前を走る軽巡洋艦『酒匂（さかわ）』の姿は霧中標的（濃霧時に艦尾から落とされロープで曳かれる船型の浮き）でしか確認する事

は出来ない。

「まるでキスカだなぁ……各艦、連絡を密に取り艦隊速度を維持。見張り員も増員し、監視を怠らないように」

「はっ」

木村は以前自らが指揮した事のある撤退作戦が行われた島の名を口にしながら、艦長に指示を出す。『伊吹』には比較的優秀な電探（レーダー）が搭載されているが、それに頼り過ぎてはいけない事を彼は熟知していた。

指示を受けた航海長が自ら双眼鏡を握りしめて艦橋から出ていくのを見届け、木村は再び窓の外に視線を移した。

「不思議な事もあるもんだなぁ……」

誰にも聞こえない程の声量で、ぽつりと呟く。

そもそもこれ程までになる濃霧は今いる海域の更に東北方、北海道よりも上の海域で6～8月の夏に発生する。そして今は2月。地域的にも時期的にも、ここまで視界が真っ白になる海霧は通常考えられない。正に異常気象と言うべき濃い霧であった。

一方で、増員されて艦橋脇や艦橋上に配置された見張り員達も、双眼鏡越しに目を皿の様にして各員が僚艦がいる方角を監視していた。

指令を受けてから5分。深みを増す海霧は止まる事を知らず、そ

のたった5分間で今まで見えていた筈の『酒匂』の霧中標的が影すらも見えなくなる。

だが、問題は自然に……しかし瞬間的にそれどころでは無い段階へと進んでいた。

「な……これは一体どういう事だ」

黒い士官服を着込み、自ら艦橋上に立って双眼鏡を覗いていた航海長が、双眼鏡を下ろしながら言った。その声色は、明らかな焦りを孕んだ声だった。

声を上げてから、周りを見渡す。すぐそばで共に監視している筈の部下達が、見えない。今数瞬前まで聞こえていた部下達の声すら、聞こえない。視界は自分が今立っている床が見えない程真っ白だ。

「ホワイトアウト……？　いや、違う」

航海長は霧や雪が深い時に起こりうる現象の名を口ずさみ、即座に否定した。敵性語だったがそんな事はこの際どうでもいい。こんな真っ白で何も見えない、まして音も聞こえない現象なんて有り得ない。この世界に有り得る筈が無い。

航海長は頭の中で呪文の様に有り得ないと連呼しながらも、咄嗟に自分のすぐ右脇にある伝声管へと手を伸ばす。僅かに残っていた理性で、彼はこの理解不能な出来事を司令へ伝えようとしたのだ。

しかし、彼のその手は伝声管を掴めなかった。……否、掴む事無く摺り抜けた。

「え……？」

思わず情けない声を出してしまう航海長。そして、彼は自分の身に起こった出来事を理解する事無く、直後に突然頭部を襲った衝撃により意識を失ったのだった。

――時は１９４５年、昭和２０年２月２０日。場所は朝鮮半島沿岸、日本海上。

この日、大日本帝国海軍物資輸送船団……通称『極部隊』は、この世界から忽然とその姿を消した。

状況

「痛ってぇ……畜生、一体何が起こったってんだ……」

『伊吹』の船体後部、搭載している水偵（水上偵察機）に搭乗する飛行兵達の待機室にて、１人の男性が頭を押さえながら室内に備え付けられた机を支えにして立ち上がった。歳は２０台前半。黒髪を長髪にしやや真面目そうな顔付き。海軍飛行兵の飛行服に身を包み、腰には茶色の革で出来た拳銃のホルスターを吊している。

その男性は黒い長髪の頭を摩り悪態をつきながら、気を失う直前まで座っていた椅子に座り直す。そして、机を挟んで向かい側で立ち上がろうとしていたもう１人の男性に声を掛けた。

「酒井、怪我は無いか？」

「いや、俺は大丈夫っすよ。少尉こそ頭押さえて、大丈夫なんですか？」

男性の事を少尉と呼んだもう１人の男性も、少尉と同じく飛行服を着ていた。少尉より歳はやや若く、２０にいくかいかないか。頭を丸刈りにし、少尉とは打って変わって陽気そうな雰囲気を醸し出している。

そんな彼――酒井二飛曹（二等飛行兵曹）に心配された少尉は、頭から手を離しその手をひらひらと振って見せた。

「あぁ、少し打っただけだから大丈夫だ。……それにしてもいきなり、それも同時に気を失うなんてな。俺もお前もてんかんなんて持ってないだろ？」

「そんな事当たり前じゃないっすか。俺なんて生まれてこの方風邪すらひいた事ないんですから」

少尉はふむ……、と頷いて腕を組んで目をつぶる。気を静めてみると、上が俄かに騒がしい事に彼は気付く。

「どうしますか少尉？　甲板に上がってみます？」

彼も何か異様な雰囲気に気付いたのだろうか、椅子から立ち上がってそう言う酒井を少尉は、目を開けて静かに制した。

「いや、待機だ。だが出撃する準備はすぐにしておいた方がいい。今の時間の“当番”は俺達だからな」

酒井は輝いた表情で頷き、飛行帽を取りに壁掛けへと走る。だが、少尉の顔は一向に晴れない。

言い表しようの無い、漠然とした恐怖感。それが自分の心を包み始めている様な気がして、不安だったからだ。

だが、こういう時にこそ水上偵察機の力が真価を発揮する。

少尉は不安を払拭するかの様に頬を両手でぴしゃりと叩くと、自らも飛行帽を取るべく椅子から立ち上がり、壁掛けへと赴くのだった。

―――――――――

その頃、『伊吹』の心臓たる艦橋では。

「艦隊全艦、異常は無いか？」

「はっ、只今殿艦を努める『浅間』から異常ナシの無電が入りました。故障艦、落伍艦いずれもありません」

艦隊司令である木村昌福少将の問い掛けに、1人の兵士が答える。報告を聞いた木村は、黒く立派なカイゼル髭を撫でながら唸った。

ちなみに『浅間』とは伊吹型重巡洋艦の2番艦であり、彼らが乗る『伊吹』と共に海軍最新鋭の巡洋艦である。

「うーむ……まさか艦橋処か、艦隊の将兵全員が同時刻に気絶するとはなぁ。輸送艦に便乗しとる陸軍の兵士さん達も大丈夫なのかな？」

再度の問い掛けに、同じ兵士がもう一度答える。

「はっ、陸軍の便乗兵もその他便乗者も全員異常無いとの事です」

それを聞いた木村は安心した表情で頷き、脇に控える参謀長へと目を向ける。

「参謀長。君はこれをどう見るかな？」

「はっ……正直、私もこのような事態は始めてです。しかし、霧を抜けたのであれば問題は――――」

軍服に金の参謀モールを着けた参謀長がそこまで言った時、艦橋に1人の士官が飛び込んで来た。それは、霧に入った時に双眼鏡片手に上へ行った航海長その人であった。

「か、艦長！」

「どうした航海長。騒々しいぞ」

艦長は航海長を諌めるが、彼は驚きを隠せない様子で続ける。

「悠長にしている場合ではありません！　陸が……陸が東に見えています！」

航海長のその言葉に、艦橋にいた全員がギョッとした。

何故なら、朝鮮半島沿岸を南下していた自分達は西に陸――半島が見えていた筈である。艦の方位磁針も、確かに朝鮮半島が西にある事実を指していた。

だが、それが航海長の言では東にあると言う。まず、艦橋の誰もが航海長の見間違いを疑った。

「航海長……君の誤認では無いのか？」

「艦長、断じて違います。司令も左手の方向を見て下さい」

航海長に言われて、艦橋にいた手の空いている者達が皆艦橋の左舷側の窓の奥を見遣る。そして、それら全員がほぼ同時に息を呑んだ。

……確かに、艦隊の“東”に大陸が拡がっていたからだった。直後に艦長の命により方位磁針を確認した兵士も、彼らの目がおかしくなった訳では無い事を知らせる。

一時騒然となる艦橋を艦長が鶴の一声で黙らせた後、自らもそれを確認した木村が口を開いた。

「……艦長、艦速１２ノットへ減速。各艦にもそう伝えてくれ。それと陣形そのままで、距離を詰めるようにともな」

それは全く緊張も焦燥の欠片も無い、冷静な指示だった。

艦長は木村の指示に直ぐさま従い、兵へと更なる指示を下し始める。

混乱もつかの間。きびきびと動き出した艦橋の中、当の木村はやはり全く緊張の感じられない声で、

「ふぅむ……こりゃあ大変な事になりそうだなぁ」

暢気にそう呟いたのだった。

――――――――

それから1時間後。12ノットへの減速と各艦への密集を命じた木村は、艦隊を陸へと寄せて錨を下ろし、完全に停船させていた。

輸送船を中心とした輪形陣の護送船団は、今は旗艦から目視で全艦を見渡せる程に集合している。海上は穏やかで、錨も下ろしているために衝突の心配は無い。

更に木村は各艦の艦長を旗艦『伊吹』に呼び寄せ、参謀達と共に状況説明とこれからの行動を話し合った結果、水偵による周辺偵察が行われる事になった。更なる状況把握の為この案が1番妥当であろうと木村が言い、事実皆そう思ったからである。

かくして命は下り、『伊吹』の船体後部にある水偵搭載場所に、2人の飛行兵の姿があった。

「鳥居少尉、いよいよ出番っすね！」

「あぁ。酒井も興奮してカメラ落とすなよ？」

「大丈夫っすよ。少尉も墜とさないで下さいよ？」

「ははっ、そっちの方が逆に難しいな」

そう言いながら彼らは笑う。

飛行帽を被って準備を万端に整えた２人は、先程待機室で話していた少尉こと鳥居雪彦（とりいゆきひこ）海軍少尉と、酒井こと酒井忠也（さかいちゅうや）海軍二等飛行兵曹だ。

鳥居は訓練と本土周辺の定時哨戒以外では作戦中の初出撃となる酒井を宥めながら、カタパルトに載せられた愛機を見上げた。

翼と胴体が濃緑色に塗られた、双フロート式の水上機。両翼と胴体側面には、白い縁取りをされた赤い日の丸。

下を見ればフロートにも濃緑色の塗装がされているが、両翼下面と胴体下面は明るい灰色に塗られている。そして、両翼からは水上偵察機には有る筈の無い２０ｍｍ二号四型機銃の黒い銃身がそれぞれ１本ずつ生えていた。

そう、この機体は日本海軍が今まで使用してきた水上偵察機とは少し違う。

その名は、水上偵察機『瑞雲（ずいうん）』。

水上偵察機の名を冠してはいるが、重い爆弾を搭載しての急降下

爆撃や良好な運動性と２０ｍｍ機関砲を活用した対空戦闘等、水上偵察機の概念を超えた日本海軍の誇る新型水上機であった。

本作戦より搭載されたこの『瑞雲』は重巡『伊吹』『浅間』に３機ずつ、軽巡『酒匂』に２機の計８機が搭載されている。その貴重な艦隊の航空戦力から木村は今回、『伊吹』と『浅間』から１機ずつ偵察に繰り出す事にしたのだ。

そして『伊吹』から発進するこの２番機が、鳥居の愛機であった。

暫く愛機を眺めていた鳥居だったが、整備兵が梯子を持ってくるのを確認して脇の酒井へと声を掛ける。

「よし、酒井。搭乗するぞ」

「了解っす！」

２人は整備兵が架けた梯子を伝い、『瑞雲』へと乗り込む。

この機体は２人乗りであり、搭乗員は背中合わせになる様に搭乗する。勿論操縦士が前に、航法士兼後部機銃手が後ろだ。

だが今回、航法士席に搭乗した酒井の手にはごてごてとした黒い大きなカメラが握られている。この大型カメラで沿岸内陸の様子を撮影するのが今回の主任務だった。

梯子が外され、整備兵が離れるのを確認した鳥居はエンジンのスタータースイッチを押す。直後にブスブスという排気音。続いて排気煙と共にババババ……！　と３枚のプロペラが勢い良く回り出

した。

今までは整備兵が一々クランク棒をエンジン下部に差し込み、くるくると回してからエンジンを作動させなくてはいけなかったが、鳥居搭乗の『瑞雲』は違う。改良によって搭載された新型の電動スターター（セルモーター）により、自力でエンジンが掛けられるのだ。

と、いっても数回始動に失敗すれば再充電が必要になる代物なのだが……。

ともかく、十分にエンジンの回転数を上げた『瑞雲』はカタパルトから射出され、大空へと飛び出して行った――――。

状況（後書き）

水上偵察機『瑞雲』。

水偵として史上最高傑作に近い性能を誇りましたが、登場時は既に水偵の時代では無く、このように大型艦艇に搭載される事はありませんでした。

本作に登場する『瑞雲』は、二号四型２０ｍｍ機銃を搭載したり、爆弾懸吊装置を追加して小型爆弾搭載数を増やしたり等の小改良型です。

史実では不遇であった当機が、どのように活躍してくれるのか。作者自身も楽しみです。

ご意見、ご感想は下さると泣いて喜びます。ではこの辺でノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5039z/

護送船団が往く

2011年12月31日01時42分発行